

子どもの実態から重点化した基礎的・汎用的能力の育成を目指して

—— 人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善を通して ——

キャリア在り方生き方教育研究会議

榊原 洋介¹

田中 潤也²

石川 友則³

岡田 哲平⁴

要 約

本市では、平成 28 年度から川崎市版キャリア教育であるキャリア在り方生き方教育が全市立学校で開始された。各学校では、「自分をつくる」「みんな一緒に生きている」「わたしたちのまち川崎」の 3 つの視点で教育活動全体を見直し、特色を生かした様々な取組が行われてきた。担当者会でのアンケート結果から、取組が一部の教科等になっていることや、キャリア在り方生き方教育を意識した授業を効果的に行うにはどうしたらよいのか等、全市をあげて推進した上での課題が見えてきた。

本研究では、特に多くの学校で課題として挙げられた教科におけるキャリア在り方生き方教育について焦点を当てた。学びの過程を充実させることで、基礎的・汎用的能力の育成を図り、目指す子どもの姿・学校教育目標の達成を目指した。社会的自立に必要な身に付けさせたい基礎的・汎用的能力を教師と子どもが共通認識することで、社会を生きていく力の育成や今と将来をつなぐ姿にできるのではないかと考えた。はじめに、子どもの実態から基礎的・汎用的能力を重点化し、教科の特質に応じてキャリア在り方生き方教育を意識する単元・題材等の検討を行い、教育課程を編成した。次に、基礎的・汎用的能力を育成する手立てとして、「人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善」を行った。

結果、基礎的・汎用的能力の育成は、子どもの実態から重点化すると効果的であることが分かった。また、教師が教科の特質に応じて、「人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善」を行うことは、教科の内容だけにとどまらず、社会を生きていく力の育成や、他教科等や将来・実生活につながるが見えてきた。

キーワード：学校教育目標、子どもの実態、基礎的・汎用的能力、重点化、人との関わり、学びのつながり、授業改善

目 次

I 主題設定の理由	14	(1) 中学校 1 年社会科	19
1 はじめに	14	(2) 中学校 2 年外国語	23
2 新学習指導要領から	14	(3) 小学校 5 年体育(保健)	27
3 市内の現状と課題	15	(4) 保護者から見たキャリア在り方生き方教育	30
4 研究主題について	16	III 研究のまとめ	31
II 研究の内容	17	1 研究の成果	31
1 研究の構想	17	2 今後の課題	32
2 研究の方法	18	主な参考文献	32
3 研究の実際	19	指導助言者	32

¹川崎市立木月小学校教諭（長期研究員）

²川崎市立下河原小学校教諭（研究員）

³川崎市立川崎中学校教諭（研究員）

⁴川崎市立はるひ野中学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 はじめに

我が国では近年、キャリア教育の重要性が高まってきている。その背景には、情報化やグローバル化等、世界的な構造の変化や、国内では少子高齢化、核家族化の進行により、祖父母や兄弟姉妹、異年齢集団など様々な人々と関わる頻度が減るといった家庭環境の変化等がある。このような社会全体の急速な変化が、子どもたちの成育環境を変化させ、自立のために必要な力や態度が自然には育ちにくい状況にある。具体的な課題として、「人間関係をうまく築くことができない、自分で意思決定できない、自己肯定感をもてない、将来に希望をもつことができない」¹といった子どもの増加が指摘されている。

キャリア教育が文言として、公的な文書に初めて登場したのは、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（平成 11 年 12 月）」である。その後、様々な報告や提言が出され、平成 23 年 1 月の中央教育審議会答申において、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」²と定義し、「基礎的・汎用的能力」を、育成すべき力として提示している（表 1）。基礎的・汎用的能力は包括的な能力概念であり、相互に関連・依存した関係にある。そのため、すべての者が均一に身に付けるべき力ではない。このことを踏まえ本研究では、育成すべき基礎的・汎用的能力は、子どもの実態に応じて、どのような力を付けていく必要があるかを考え、各学校で具体的な姿として設定していくこととした。

表 1 キャリア教育で育成すべき基礎的・汎用的能力

人間関係形成・ 社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて、自分の考えを正確に伝えることができるとともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力
自己理解・ 自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力
課題対応能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し、適切な計画を立ててその課題を処理し、解決することができる力
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置づけ、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力
これらの能力は、包括的な能力概念であり、それぞれが独立したものではなく、相互に関連・依存した関係にある。このため順序があるものではなく、これらの能力をすべての者が同じ程度あるいは均一に身に付けることを求めるものではない。	

2 新学習指導要領から

平成 29 年 3 月 31 日に告示された小学校及び中学校学習指導要領総則には、以下のようにキャリア教育の充実を図ることが明記された。

小学校学習指導要領 第 1 章 総則 第 4 児童の発達の支援 1 (3)

「児童が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。」

¹小学校キャリア教育の手引き<改訂版> 文部科学省 平成 23 年 5 月

²今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について 中央審議会答申 平成 23 年 1 月

中学校学習指導要領 第1章 総則 第4 生徒の発達の支援 1(3)

「生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要しつつ各教科等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図ること。その中で、生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと。」

平成 29 年 6 月・7 月に示された小・中学校学習指導要領解説総則編では、キャリア教育の理念が浸透し様々な取組が各学校で展開されている一方で、進路指導や将来の夢を描くことばかりに力点が置かれた取組など狭義の意味でのキャリア教育にとどまり、これまで学校の教育活動全体で行うとされてきた意図が十分に理解されていないという課題も記されている。そして、「将来の生活や社会と関連付けながら、見通しをもったり、振り返ったりする機会を設けるなど主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進めることがキャリア教育の視点からも求められる。」「キャリア教育は、教育活動全体の中で基礎的・汎用的能力を育むものであることから、夢を持つことや職業調べなどの固定的な活動だけに終わらないようにすることが大切である。」³と明記されている。また、全ての教科等の学習指導要領解説において、第1章総説で「知・徳・体にわたる『生きる力』を子供たちに育むために『何のために学ぶのか』という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していくこと」⁴と明記されている。

本研究では以上のことを受けて、キャリア教育は、社会を生きていく力を育成することができるよう学校の教育活動全体を通じて充実を図ると捉え、各教科等においては「何のために学ぶのか」を子どもたちが実感できる授業をしていくことがキャリア教育の視点からも大切だと考えた。

3 市内の現状と課題

かわさき教育プラン⁵基本政策 I 「人間としての在り方生き方の軸をつくる」の主な取組としてキャリア在り方生き方教育が位置づけられている。キャリア在り方生き方教育は、文部科学省の示すキャリア教育に、郷土を愛し、将来のふるさと川崎の担い手を育成する視点を加えたものである。平成 28 年度から本市の全市立学校で開始し、「自分をつくる」「みんな一緒に生きている」「わたしたちのまち川崎」の3つの視点で各学校が教育活動を見直し、特色を生かして様々な取組が行われている。

キャリア在り方生き方教育担当者を対象にしたアンケート調査結果の回答から、全体的な傾向が見えてきた。「キャリア在り方生き方教育について、共通理解ができていますか」という問いに、「職員全体」「部会や担当者」でできていると答えた割合は、昨年度と比べて 85%から 90%に上昇している(図1)。次に、「特別活動、生活科・総合的な学習の時間、道徳以外の教科で、キャリア在り方生き方教育を意識した授

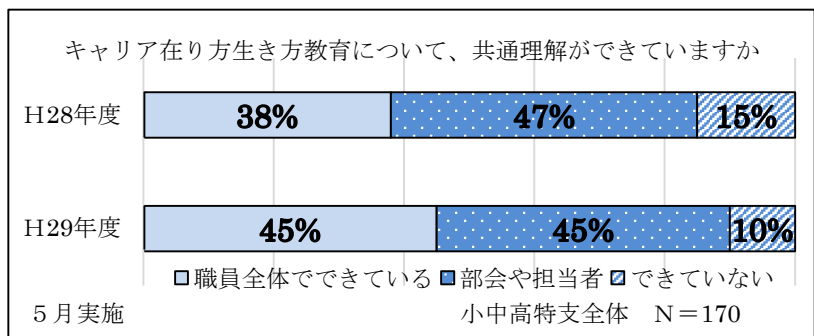


図1 キャリア在り方生き方教育担当者会 進捗状況アンケート①

³ 小学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省 平成 29 年 6 月 p.100

⁴ 各教科等の学習指導要領解説 文部科学省 平成 29 年 6 月・7 月 p.3

⁵ 第2次川崎市教育振興基本計画 かわさき教育プラン 川崎市教育委員会 平成 27 年 3 月

業実践をしていますか」という問いに、「半分以下で」「できていない」と答えた割合が過半数を超え、教科における取組に課題を感じている現状がある（図2）。さらに、自由記述では、「特別活動、生活科・総合的な学習の時間、道徳以外の教科でどのように取り組んでいけばよいか分からない」「教科でキャリア在り方生き方教育を意識して授業を行うということは、どういうことか具体的に知りたい」等、キャリア在り方生き方教育の推進に関する悩みを挙げる記述が多かった（表2）。つまり、教師のキャリア在り方生き方教育に対する理解は深まり、意識が向上したことで、教師一人一人がキャリア在り方生き方教育を身近な問題として捉えてきたということが分かった。

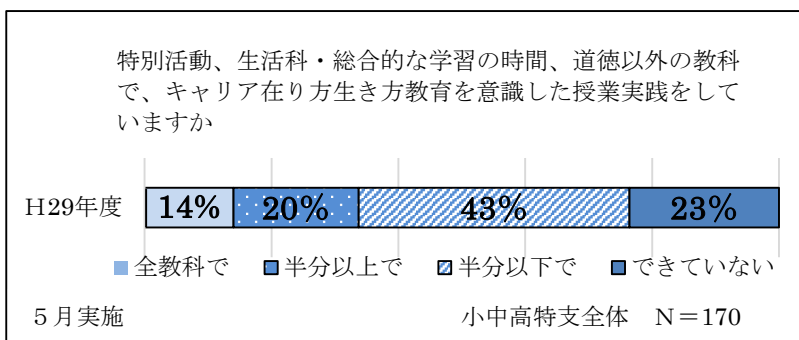


図2 キャリア在り方生き方教育担当者会 進捗状況アンケート②

表2 キャリア在り方生き方教育担当者会 進捗状況アンケート③

自由記述
<ul style="list-style-type: none"> ・特別活動、生活科・総合的な学習の時間、道徳以外の教科でどう取り組んでいけばよいか分からない ・教科でキャリア在り方生き方教育を意識して授業を行うということは、どういうことか具体的に知りたい ・子どもの実態をしっかり捉えられていなかった ・職員全体で認識を同じにして、同じ方向を見て取り組むことがなかなかできず難しい ・キャリア在り方生き方教育を推進したいという思いがあるので、新学習指導要領との関連を知りたい ・キャリア在り方生き方ノートの実用について、職員全体で話し合いをもち、見直し、実践していきたい 等

4 研究主題について

本来キャリア教育は学校の教育活動全体で行うものである。しかし、キャリア教育が文言として中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（平成11年12月）」に書かれた頃は進路指導や職場体験等、狭義の意味で捉えられ、また、前述の新学習指導要領解説で述べられている課題や本市各学校での課題からも、キャリア教育が依然として狭義の意味で捉えられてきたところもある。

そこで、本市各学校で実施されてきたキャリア在り方生き方教育について類型化してみた（図3）。特別活動において自治的活動を行ったり、生活科・総合的な学習の時間等において地域の人、もの、ことから学んだり、道徳において道徳的価値と自分との関わりについて考えたりすることは今までも様々な実践がある。しかし、その他教科での実践は少ない。そこで教科におけるキャリア在り方生き方教育に焦点を当てて研究を進め、次のような主題を設定した。

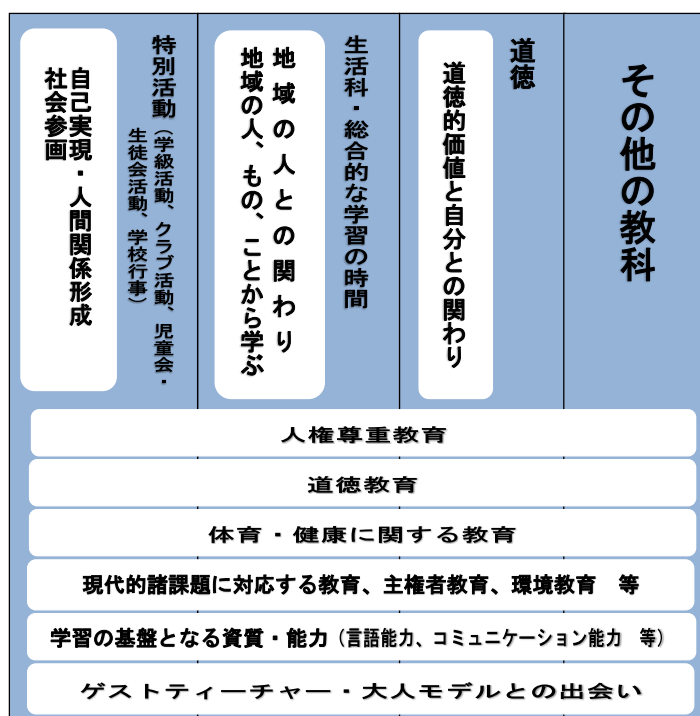


図3 実施されてきたキャリア在り方生き方教育の類型

研究主題

子どもの実態から重点化した基礎的・汎用的能力の育成を目指して
— 人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善を通して —

II 研究の内容

1 研究の構想

(1) 教科におけるキャリア在り方生き方教育と基礎的・汎用的能力の育成

教科におけるキャリア在り方生き方教育と聞くと、教科の中に、何か新しいものが入ってくることをイメージしてしまうかもしれないが、藤田は、「全ての教育活動を通じたキャリア教育の実践において最も大切なことは、それぞれの教育活動の中にすでにあるキャリア教育の要素、つまり、『キャリア教育の断片』を見出すことです。『つけ加える』のではなく、『見出す』こと。」「教科の本筋にある『キャリア教育の断片』を意識した授業を展開するのですから、そこで高められる力は、本来教科として高めた力でもあるわけです。」⁶と述べている。つまり、教科におけるキャリア在り方生き方教育とは、教科で育成したい資質・能力の中にあるものと捉えることができる。そして、教科内容をキャリア在り方生き方教育の視点で見直したときに、効果的に基礎的・汎用的能力の育成を行うためには、子どもの実態や教科の特質に応じて重点化していくことが有効ではないかと考えた。

前述の新学習指導要領総則に明記された「社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていく」という部分は、子どもが将来、社会を生きていくために基礎的・汎用的能力を身に付けていく、また、「学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら」という部分は、今学んでいることと将来とが繋がっていること、子どもが学ぶ意義を実感できることを大切にすると捉えられる。

そこで本研究では、子どもが学校で各教科等を「何のために学ぶのか」を改めて考えた。それは、子どもが将来、自分らしく社会を生きていくためであり、そのために各学校は、学校教育目標達成を目指して教育課程が編成されていると再認識する必要があるだろう。各教科等の学習は個々に途切れるものではなく、重なり合って子どもの将来につながっていくものであると捉えることが大切である。教科の枠にとどまらず、学んだことを他教科等や将来につなげることで社会を生きていく力の育成ができる。その手立てとして「人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善」をしていくこととした。子どもは、人との関わりを通して自分と他者、社会との関係から基礎的・汎用的能力を身に付け、学びのつながりを通して学ぶことの意義等を捉えることができる。各教科等における学習との関係性及び、教育課程企画特別部会「論点整理」の方向性を踏まえて示されたキャリア教育における資質・能力（表3）を参考に基礎的・汎用的能力の育成ができると考えた。

表3 キャリア教育における資質・能力の三つの柱（答申別紙6）

知識・技能	<ul style="list-style-type: none">・学ぶこと・働くことの意義の理解・問題を発見・解決したり、多様な人々と考えを伝え合って合意形成を図ったり、自己の考えを深めて表現したりするための方法に関する理解と、そのために必要な技能・自分自身の個性や適正等に関する理解と、自らの思考や感情を律するために必要な技能
思考力・判断力・表現力等	<ul style="list-style-type: none">・問題を発見・解決したり、多様な人々と考えを伝え合って合意形成を図ったり、自己の考えを深めて表現したりすることができる力・自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」をもとに、自分と社会との関係を考え、主体的にキャリアを形成していくことができる力
学びに向かう力・人間性等	<ul style="list-style-type: none">・キャリア形成の方向性と関連づけながら今後の成長のために学びに向かう力・問題を発見し、それを解決しようとする態度・自らの役割を果たしつつ、多様な人々と協働しながら、よりよい人生や社会を構築していこうとする態度

⁶ 藤田晃之『キャリア教育基礎論—正しい理解と実践のために—』実業之日本社 2014年 p.91, 93

(2) 人との関わり、学びのつながり

人との関わりとは、教科や内容により、クラス、同学年、異学年、保護者、地域の人等と関わる経験を通して、問題に迫っていく中で行われるものである。子どもたちが問題解決に向けて自分の考えを持ち、それを他者に伝え、多様な考えを知り、対話や議論をして協働的に思考する中で、自分の考えが皆に認められ、他者と協力する体験、失敗体験等を重ねる。それは、子どもたちが受動的にではなく、能動的に学習内容を習得・活用していくことである。小林は、「習得と活用は、決して両者を分離したり、手順化して段階的に捉えたりしてはならないものである。(中略) 習得と活用は順序に規定されるものではなく、両者は相互に補完しあう関係にある。活用という行為とその過程の中でこそ、習得という状態がより確かに蓄積されたり、洗練されたりするのである。」⁷と述べている。そこで、本研究では人との関わりを通して、習得した知識をより定着させるために活用することができるような授業を行った。

学びのつながりとは、今日の学びが他教科等や将来・実生活にどうつながっているか振り返る活動を通して、学びの定着を図り、学ぶ意義を子どもが実感できることである。藤田は、「授業のまとめの際などに、『今日学んだこと、取り組んだことは、(中略)これから高校生になっても、大人になっても生きるよ。例えば…』という言葉添えてみる。ほんの二、三分の言葉がけになるでしょう。この言葉こそが教科を通したキャリア教育の『肝』なのです。」⁸と述べている。本研究では、各時間の学習が実感を持った理解につながるように授業のまとめの際に、今日学んだことやその学び方を、他教科等や将来・実生活にどうつなげていけるかを子どもに投げかけ、考えさせ一緒に振り返る場面をもった。

このように、人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善を行うことを通して、基礎的・汎用的能力の育成を行い、「社会を生きていく力、今と将来をつなぐ姿」にしていけると考えた(図4)。

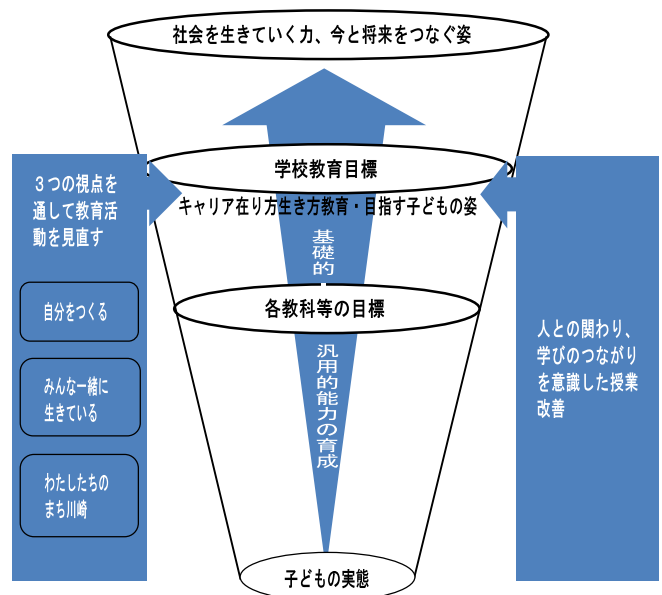


図4 研究構想図

2 研究の方法

表4 研究の手順

(1) 研究の手順

キャリア在り方生き方教育の視点で授業を見直したとき、基礎的・汎用的能力の育成が図れるように手立てを工夫し、表4のような手順で研究を行うこととした。

- ①子どもの実態調査
- ②学校教育目標、子どもの実態、教科の特質に応じて育成する基礎的・汎用的能力を重点化
- ③身に付けさせたい力の具体的な姿の設定
- ④人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善
- ⑤授業改善の効果、具体的な姿の表出状況を見取る
- ⑥子どもの実態調査
- ⑦教師の振り返り、改善

⁷ 小林宏己『授業研究 27 の原理・原則—授業力向上のための実践的思考』学事出版 2015 年 p. 94. 95

⁸ 藤田晃之『キャリア教育基礎論—正しい理解と実践のために—』実業之日本社 2014 年 p. 93

(2) 対象児童生徒と検証教科の選定

本研究では、小学校5年生の児童、中学校1年生、2年生の生徒を対象とした。教科としては、小学校5年生は体育の保健、中学校1年生は社会科、中学校2年生は外国語で検証授業を行った。学校教育目標、子どもの実態、教科の特質に応じて育成する基礎的・汎用的能力を重点化して検証を行い、子どもの変容を探った。以下、研究の実際では、検証授業を実施した順に記述する。

(3) 子どもの実態調査、変容の見取り方

キャリア在り方生き方教育のスタートは子どもの実態調査を行い、現状を把握することから始まる。アンケートは「キャリア在り方生き方教育の手引き」⁹を参考に作成した(表5)。質問事項①から③は「人間関係形成・社会形成能力」、④から⑥は「自己理解・自己管理能力」、⑦から⑨は「課題対応能力」、⑩から⑫は「キャリアプランニング能力」について「している」「ややしている」「ややしていない」「していない」の4段階で聞き、⑬⑭は学校の実態に応じて重点化した基礎的・汎用的能力についての質問を付け加えた。また、検証授業の事前と事後の変容を見取るのではなく、年度当初と年度末(本研究は日程の事情により、事後は12月)に取り、年間を通しての変容を見取ることとする。

また、検証授業を通して、人との関わり、学びのつながりを意識した授業が効果的であったのか、身に付けさせたい力の具体的な姿の表出状況を見取ることとする。

表5 子どもの実態把握アンケート調査

質 問	
①	友達や家の人、先生の意見を聞くとき、その考えや気持ちを理解しようとしていますか。
②	相手が理解しやすいように工夫しながら、自分の考えや気持ちを伝えようとしていますか。
③	係活動や委員会活動では、自分から進んでアイデアを出し、役割や仕事を見つけ、まわりのみんなと力を合わせて活動しようとしていますか。
④	自分の長所や短所について、把握しようとしていますか。
⑤	自分の興味や関心について、進んで取り組もうとしていますか。
⑥	苦手なことやうまくいかないことでも、あきらめずに取り組もうとしていますか。
⑦	分からないことやもっと知りたいことがあるとき、自分から進んで資料や情報を収集したり、だれかに質問をしたりしていますか。
⑧	何か問題が起きたとき、次に同じような問題が起こらないようにするために、何をすればよいか考えていますか。
⑨	何かするとき、見通しをもって計画的に進めたり、そのやり方などについて改善を図ったりしようとしていますか。
⑩	自分の将来について考えたり、目標をたてたりしていますか。
⑪	自分の将来の目標に向かって努力をしたり、勉強や日常生活の仕方を工夫したりしていますか。
⑫	今学校で学んでいることと、自分の将来とのつながりを考えたりしていますか。
⑬	授業中にそれぞれの教科で自分の考えを発言したり、友達に伝えたりしていますか。
⑭	上記⑬の質問の答えの理由や、発言したり、人とコミュニケーションをとったりすることに関して、なやんでいること、困っていること等を書いてください。

3 研究の実際

(1) A中学校1年 社会科

①子どもの実態調査

生徒の実態を捉えるために、年度当初にアンケート調査を行った。①から⑫の問いごとに4点満点、各々の基礎的・汎用的能力を12点満点で点数化し、生徒の分布をグラフで示した(図5)。

⑭の記述欄には「発言することが苦手」「話がかみ合わなくて口げんかになることがあ

生徒の実態調査(年度当初)

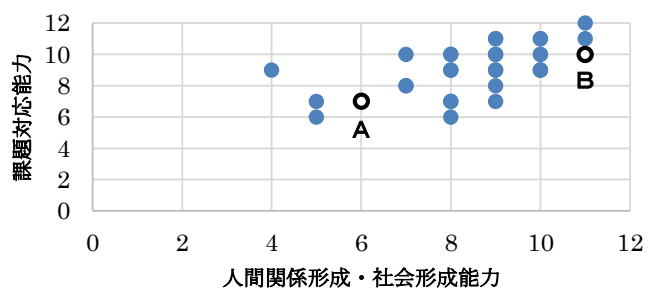


図5 A中学校で年度当初に行った実態調査アンケート分布図

⁹ 「キャリア在り方生き方教育の手引き」川崎市教育委員会 平成26年12月 p.39

る」等の記載があった。その中で、「発言して間違えることがこわい」と記載した生徒Aと、自己評価は比較的高いが教師の見取りでは、ねらいからずれてしまい、理解が曖昧になることがある生徒Bに着目した。また、クラス全体の変容を見取った。

②学校教育目標、子どもの実態、教科の特質に応じて育成する基礎的・汎用的能力を重点化

A中学校では、学校教育目標「自ら学び、自ら考え、自ら行動できる生徒を育てる」の具現化のため、キャリア在り方生き方教育全体計画、身に付けさせたい力や態度等を設定している。

クラスの生徒の実態は、自分の意見を周りの友達に伝えたり、友達の意見を聞いたりして課題に迫り解決することを苦手と感じる生徒がいる。また、意見を言える生徒と言えない生徒の差が大きくあるため、多様な他者とのコミュニケーション能力を伸ばし、どの生徒も自分の考えをしっかりと伝えられるようにしていきたいと考えた。そのために、授業内容によっては班で話し合う活動を取り入れ、課題解決能力とともに、特に人間関係形成・社会形成能力に重点を置くこととした。

本単元では、相手の話や考えを理解し、自分の考えと比べたり合わせたりする活動を増やすことにより、効果的に人間関係の形成を図り、他者と関わり合いながら自分の意見を再構築する力を付けさせたいと考えた。そして、身に付けさせたい基礎的・汎用的能力の重点を意識して授業を行うために指導案の項目1に明記した(図6)。

③身に付けさせたい力の具体的な姿の設定

A中学校の学校教育目標、子どもの実態、教科の特質に応じて重点化した基礎的・汎用的能力から、身に付けさせたい力の具体的な姿を設定した。

1学年では、「自分の考えが相手に伝わるように、根拠をもって話すことができる」「内容によって肯定的に、または批判的に話を聞くことができる」「周りの人の話を聞いて、自分の考えをより深めたり、新たな考えをもったりすることができる」と設定し、図6のように指導案の項目2に明記した。

年度当初に具体的な姿を設定しておくことで、本単元において身に付けさせたい力の具体的な姿を意識しながら授業を行うことができた。このことから、年間を通して様々な教科・単元で重点的に意識して授業を進めることができ、教科等横断的に身に付けさせたい力の育成ができると考えた。

④人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善

本単元では、終盤の9時間目に地球儀と地図等の諸資料、前時まで習得してきた知識等を活用し、地球儀と様々な地図の特徴を捉えることをねらい、検証授業を行った。

人との関わりについては、授業の導入で「今日の意識」として、話合いのポイントを伝えた。また、クラスの友達と地球儀や地図等の資料を活用しながら対話や議論をするように思考の流れを事前に考え、展開した(図7)。そして、生徒が主体的に課題解決できるように「世界はどのような姿をしているのだろうか」と単元を貫く学習問題を設定した。また本時では、自分の考えを友達に伝え、協働して問題解決していくことができるよう学習課題を「なぜ様々な種類の地図があるのだろうか」とした。補助教材として、地球儀や地図の国・大陸等を写し取れる透明なシート、世界地図を書き入れたカラーボール(球体をはさみで切り開き

社会科学習指導案	
川崎市立A中学校 指導者	
1.	キャリア在り方生き方教育・身に付けさせたい基礎的・汎用的能力の重点 人間関係形成・社会形成能力(コミュニケーション能力 話す力 聞く力)
2.	身に付けさせたい基礎的・汎用的能力の具体的な姿 ・自分の考えが相手に伝わるように、根拠をもって話すことができる ・内容によって肯定的に、または批判的に話を聞くことができる ・周りの人の話を聞いて、自分の考えをより深めたり、新たな考えをもったりすることができる

図6 A中学校検証授業指導案1ページ目

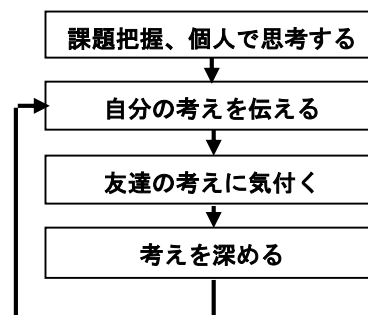


図7 人と関わり、考えを深めるための生徒の思考の流れ

平面にできる)等を準備し、生徒同士が考えを伝え合い、多様に関わり、主体的・対話的に課題解決に向かうように授業改善を行った。

学びのつながりについては、本単元の学習が小学校5年生社会科からつながり、本単元で育んだ基礎的・汎用的能力や学んだことが他教科等や、将来・実生活にどうつながっているのかを整理した(図8)。

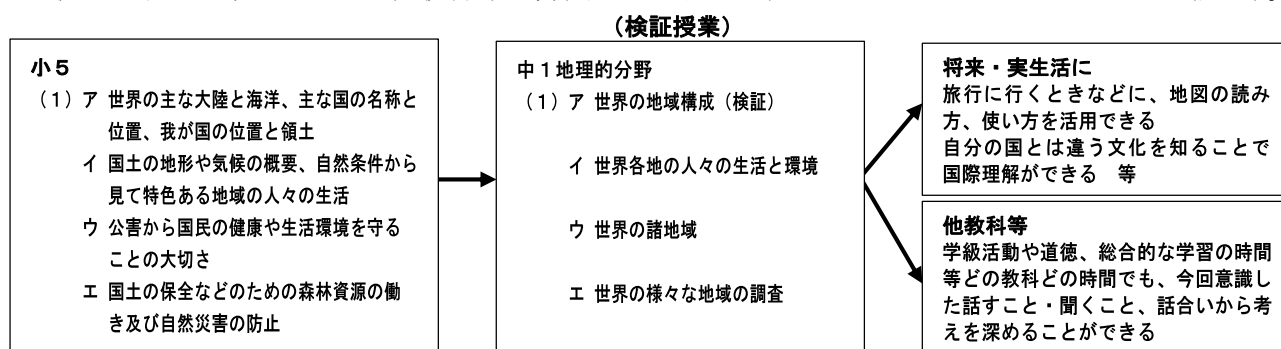


図8 A中学校検証授業における、学びのつながり

検証授業では、クラスの生徒の実態から人との関わりを意識した授業改善に重点を置き、グループでしっかり自分の考えを伝え、友達の考えを聞き、課題解決に向けてさらに考えを深めることができ、本時目標に対しての振り返りは十分にできたと言える。しかしその反面、人との関わりに時間を費やしたことで、学びのつながりについては、話し合ったり、振り返ったりすることが十分にできなかったところが課題として残った。

⑤授業改善の効果、具体的な姿の表出状況を見取る

検証授業では、既習事項や資料を生かしてグループで課題について話し合い、課題解決に迫った。その中で自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりして、理解を深めることをねらった。つまり、発言することが苦手な生徒でも自分の考えを伝えたいと思う課題や資料の工夫をし、協働して思考するという手立てを講じた(図9)。



図9 グループで協働して思考する姿

着目した生徒Aに授業直後にインタビューをした。「グループで自分の考えを伝えてどういう感想をもちましたか。友達の考えを聞いてどうでしたか。」という質問に対して、「グループだったので自分の考えがいつもより伝えられた。皆と意見を出し合えたので、いろいろな考えを知ることができ理解が深まった。」と回答した。また後日、記述式の事後アンケートを行った。「課題解決に向けて、班の人と関わりながら話し合ってみて、どのように思いましたか。」という質問に対して以下のような前向きな回答をした(図10)。

○課題解決に向けて、班の人と関わりながら話し合ってみて、どのように思いましたか。

班の皆で意見を言い合って解くということがいつも以上に進みやすかった。
 友達がいたおかげで、できたことだと思います。

図10 着目生徒Aの記述式の事後アンケート

着目した生徒Bのグループでは、「なぜ様々な種類の地図があるのだろうか」という課題を解決するために、地球儀と地図それぞれのメリ

ット、デメリットについて話し合いが行われた。地球儀と地図とを比較し、球体の地球儀を平面の地図にすることで正確に表すことができない部分が出てきてしまうと、ねらいに迫るところまでには至らなかった。しかし、全体共有の時間において自分のグループで考えたことを伝え、他グループの説明を聞き

ていた際に、「ああ、そういうことか」と呟きながら話を聞いていた(図11)。生徒Bに授業後にインタビューをした。「あの呟きは、どういう思いから出たのか」という質問に対して、「どうやって作ればよいか考えていたけどできなくて、見たらできていたから『なるほど』と思った」と回答した。自分がやりたいと思っていたことはグループではできなかったが、他グループの説明を聞き、考えが深まったと見取ることができる。事前に設定した具体的な姿が表出したと言える。

また、クラス全体の様子を把握するために、授業を行った3クラス92名の生徒のアンケート記述を集計した。グループの人と関わりながら課題解決を行ったことを肯定的に捉えている生徒が83名という結果だった。「班の人と話し合いをすると、自分の考えでは思いつかなかったことがたくさんあって、考えが広がった」「みんなと話をして関係がよくなったし、自分が分からないところも友達と話して分かるようになるし、自分から調べたい事ができ分かるまでできるところがよかった」等、約90%の生徒は前向きに捉えていた。



図11 自分のグループの補助教材のカラーボール(左)と他グループの補助教材のカラーボール(右)

さらに、他の質問内容でも以下のような記述がほとんどで、肯定的なアンケート結果が出た。特に、うまくいかないことやつまづきに着目をして、それをどう乗り越えていくかを見取った(図12)。

○うまくいかなかったことを経験したり、先生や班の人と協力して乗り越えたりしたことでどんなことを思いましたか。

うまくいかないときは、みんなと話し合っ
て解決したり、僕はこう思うけど、○○さん
はどうか? みたいにみんなの意見を
とりいれて答えを見つけたりしまし
た。

うまくいかなかったのを乗り越えたこと
で、聞いて授業するよりも理解が
きた。

図12 A中学校記述式の事後アンケート

人との関わりを意識した授業改善をして、重点化した基礎的・汎用的能力の育成をねらった。うまくいかないことやつまづきがあっても他者と協働して思考していくことで解決していける学習過程の工夫を行った。それにより、その経験が本時の学習内容の定着や深まりを生み、周りの人と関わりながら協働して思考し解決する大切さを生徒が実感する機会となったと考える。このことから、A中学校において人との関わりを意識した授業改善は効果的であったと捉えた。

⑥子どもの実態調査

年度当初と年度末で比較したとき、A中学校で重点を置いた人間関係形成・社会形成能力のアンケート結果は上がった。様々な単元でも意識して取り組んだことが上がった要因として考えられる。しかし、その他の諸能力は下がる結果となった。中学生になり、心の成長とともに自己評価の判断が年度当初よりも厳しくなった生徒がいることも考えられるが、授業改善の見直しや学校全体での共通理解が改めて必要である(図13)。

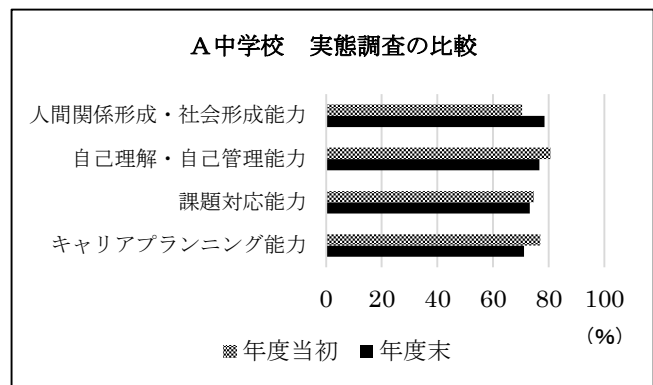


図13 A中学校 実態調査の比較(年度当初と年度末)

⑦教師の振り返り、改善

一つ目は、教師側が身に付けさせたい力を意識して授業をすることで、生徒自身が目指す姿を意識して活動する場面が見られた。授業の導入で「今日の意識」を生徒に提示したことは効果的であった。

二つ目は、授業のまとめの時間の大切さを改めて感じた。今日の学びがこれからの学びへ、自分の将来・実生活につながっていくことを生徒と話し合うことは、「どうして勉強するのだろうか」と考える中学生が多い中、学ぶ意義を考え深めるためにも必要な活動であることが分かった。

三つ目は、教科として捉えさせたい内容や目標が変わるわけではなく、単元構想を工夫したり、授業改善をしたり、目標達成に至るまでの過程を工夫することで、より効果的にねらいに迫れることが分かった。今後も他単元で取り組んでいきたい。

(2) B中学校2年 外国語(英語科)

①子どもの実態調査

B中学校の生徒の実態を捉えるために、年度当初にアンケート調査を行った。A中学校同様に点数化し、生徒の分布をグラフで示した(図14)。

記述欄には、特段書き込みをしている生徒はいなかった。そこで、アンケートの分布、教師の見取りを基に着目生徒を決めた。話し合っ

て自分の考えを伝えることはできるが、あまり英語が得意ではない生徒Cと、普段友達とコミュニケーションをとることは上手であるが、授業中になると少し消極的になってしまう生徒Dに着目した。特に二人は、今学校で学んでいることと、自分の将来とのつながりについて、あまり実感できないと答えていることもあり、着目することにした。また、クラス全体の変容を見取ることとした。

②学校教育目標、子どもの実態、教科の特質に応じて育成する基礎的・汎用的能力を重点化

B中学校では、学校教育目標「自分を生かして豊かに生きる(楽しく学ぼう)・思いやりをもって生きる(助け合おう)・心身ともに健やかに生きる(明るく生活しよう)・人々とともに生きる(だれとでも仲良くしよう)」の具現化のため、キャリア在り方生き方教育全体計画では「自分を肯定的に捉え、自らの考えで行動することができる」「互いを認め思いやりの気持ちをもって接することができる」「地域に愛着を持ち、進んで地域に貢献することができる」と目指す子ども像を設定している。

第2学年としては「人の意見を受け止め、自分の考えを明確に伝えることで、共通の目標に向かって活動できるようにする」を学年目標にしている。

英語科では教科の特質を生かして、人間関係形成・社会形成能力(コミュニケーション能力)の育成に重点を置いて取り組んでいくこととする。そして、身に付けさせたい基礎的・汎用的能力を明確にするため、指導案の項目1に明記した(図15)。

③身に付けさせたい力の具体的な姿の設定

B中学校の学校教育目標、子どもの実態、教科の特質に応じて重点化した基礎的・汎用的能力から、身に付けさせたい力の具体的な姿を設定した。

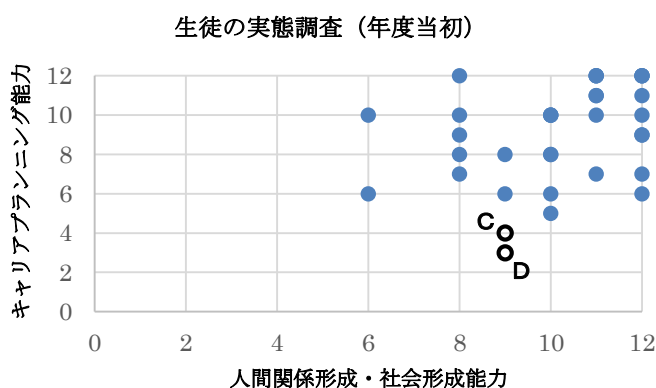


図14 B中学校で年度当初に行った実態調査アンケート分布図

外国語(英語科)学習指導案	
川崎市立B中学校 指導者	
1.	キャリア在り方生き方教育・身に付けさせたい基礎的・汎用的能力の重点 人間関係形成・社会形成能力(コミュニケーション能力)
2.	身に付けさせたい基礎的・汎用的能力の具体的な姿 ・相手を尊重し、思いやりの気持ちをもって接することができる ・情報を整理し、状況に応じて周りに声をかけることができる

図15 B中学校検証授業指導案1ページ目

2学年では、「相手を尊重し、思いやりの気持ちをもって接することができる」「情報を整理し、状況に応じて周りに声をかけることができる」と設定し、図15のように指導案の項目2に明記した。

年度当初に具体的な姿を設定しておくことで、年間を通して様々な教科・単元で意識して授業を進めることができ、教科等横断的に身に付けさせたい力の育成を行うことができる。それを生徒と共有するために、教室に身に付けさせたい力の具体的な姿を掲示した。

④人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善

本単元では、中盤の5時間目に既習の表現“Could you～?” “Shall I～?” “May I～?”を使って、場面に応じた会話をするをねらい検証授業を行った。そして、単元が終わった後には、学級活動の時間において、英語の授業を通して意識した「協働して話し合うことは、他教科等でも通じる大切な力である」と子どもたちと話し合い、確認した。

人との関わりについては、B中学校の「CAN-DO リスト」を確認し、考えることにした。話すこと・やり取りの項目で「初歩的な英語を用いて、ALT や友達と2分間会話することができる」「与えられた場面設定の中で、その状況に応じた会話をする」と設定している。「初歩的な英語を用いて、ALT や友達と2分間会話することができる」

については、年間を通じて授業の導入の時間に前単元までの既習表現を使ってペアで会話練習を実施している。本単元では「与えられた場面設定の中で、その状況に応じた会話をする」という本時目標の達成に向けての活動を考えた。会話をするためには人との関わりが必然的であり、本時では特に、場面に応じてよりよい会話文をつくるためにクラスの友達と対話や議論をするような授業展開を考えて行った(図16)。場面設定については、「レストラン、道案内、洋服店、学校内、ハンバーガーショップ」とした。場面の状況に

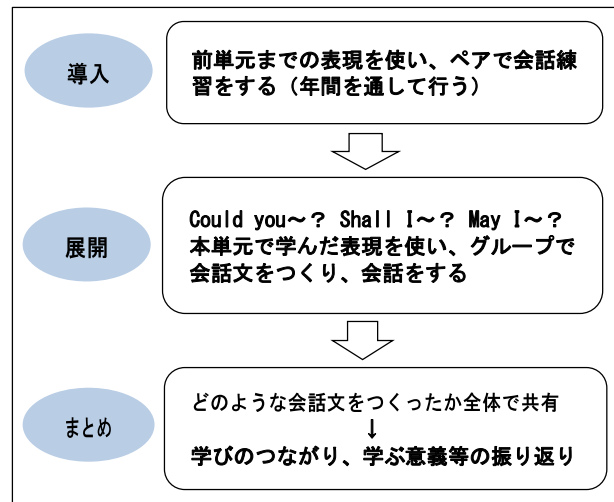


図16 人との関わりで学んだ表現を生かせる授業展開

応じた会話文について自分の考えを友達に伝え、友達の考えを聞き、協働してよりよい会話文をつくる活動を通して、コミュニケーション能力を育成する授業改善をした。

学びのつながりについては、本単元の学習が小学校5年生、6年生、中学校1年生からつながっており、本単元で育んだ基礎的・汎用的能力や学んだことが今後の英語科の授業、他教科等や、将来・実生活にどうつながっているのかを整理した(図17)。

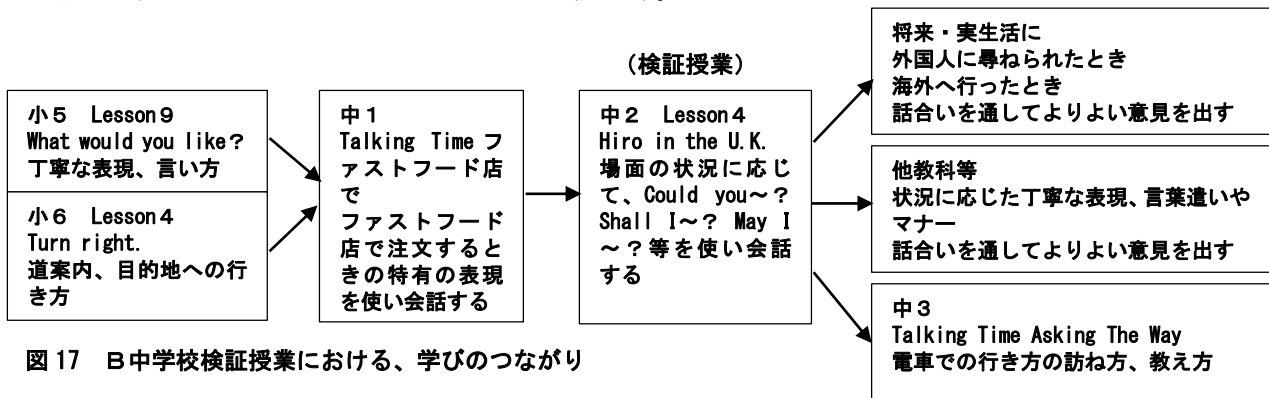


図17 B中学校検証授業における、学びのつながり

英語科の授業で学んだ表現をどのような場面で使うことができるかを自分で考え、皆で共有する時間を設定することで英語を学ぶ意義を生徒が実感していくことにつながる。本時では、今回学んだ表現は、教師が以前から使っていたものであることを生徒が気づき、日常的に使える表現であると捉えた。このような取組を毎単元行うのではなく、子どもが特に考えやすい単元で取り組むことが大切である。

⑤授業改善の効果、具体的な姿の表出状況を見取る

検証授業で着目生徒Cのグループは、本単元で学んだ表現の“Could you～?” “Shall I～?” “May I～?”を使って、レストランの場面設定での会話文づくりを行った。生徒Cは話し合うことは前向きにできるので検証授業においてもグループの友達の考えを聞き出したり、皆の考えを集約したり、進行を上手に行っていた。後日とった記述式のアンケートからも友達と協力したことが見取れた(図18)。

○班の人と関わりながら話し合いを通して英作文をした感想を書いてください。

自分が英語で表せる事が少ないので、班の人とアイデアを出し合い、1つの作品にできる所が良かったです。

図18 着目生徒Cの記述式の事後アンケート①

アンケートに書いてある通り生徒Cは会話文づくりをするために英語で表せる事は少なかったが、グループでの話し合いの進行を積極的にを行い友達の考えから学んでいた。

単元に入る前に生徒と再確認した目指す姿を意識して行っていたと言える(図19)。あまり英語が得意ではない生徒Cにとって、人との関わりを意識した授業改善は効果的であったと捉えた。

○「相手を尊重し、思いやりの気持ちをもって接しよう」「皆で意見を出し合い、学習したことを生かせるようにしよう」を意識して授業を進めてきてどんなことを思いましたか。

班員の1人ひとりの意見が違い、難しいところもあったけど、それによって一番いいストーリーができたので良かったと思います。

図19 着目生徒Cの記述式の事後アンケート②

着目生徒Dのグループは、洋服店の場面設定での会話文づくりを行った。同グループの他の生徒が場面設定の流れを考えて

くれたことに反応するように生徒Dは、「この場合、英語でどう言えばよいのかな」「Shall Iをどう使おうか」等、話し合いを通して会話文づくりを行うことができ、よりよい会話文にするために、ワークシートの付箋を入れ替えて順序を考えることができた(図20)。授業中盤には、教師からの全体への指示により、他のグループがどのように進めて会話文をつくっているか見に行き、自分のグループの友達に伝えて生かそうとしていた。事後アンケートでも以下のように回答しており、生徒Dにとっても人との関わりを意識した授業改善は効果的であったと捉えた(図21)。

○「相手を尊重し、思いやりの気持ちをもって接しよう」「皆で意見を出し合い、学習したことを生かせるようにしよう」を意識して授業を進めてきてどんなことを思いましたか。

相手の意見を聞くことで、自分が思いつかなかった事や考えなかった事があって、人の意見を聞くことで自分の考えが広がったと思った。

図21 着目生徒Dの記述式の事後アンケート

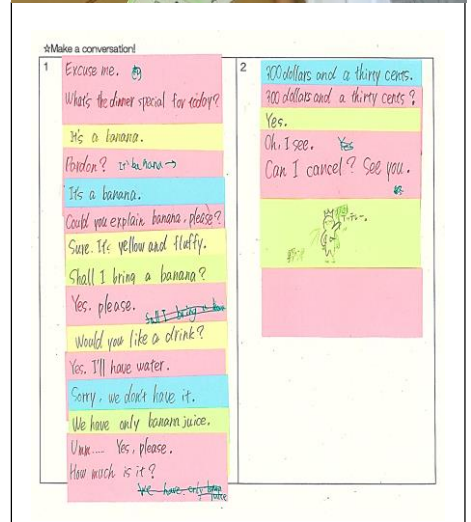


図20 付箋を用いて話し合う様子とワークシート

また、クラス全体の様子を見るために、授業を行った4クラス122名の生徒の記述について集計をした。友達と関わりながら会話文づくりをしたことを肯定的に捉えている生徒が107名という結果だった。「自分たちでその表現を使った会話をするので実際どんなときに使うのかとても分かりやすかった」「自分とは違う考え方もつ人がいるため、同じことを伝えるにも違う英文を考えたということがあり、このように楽しく学んだことを生かせる場は必要だし、もっと知識を共有していきたい」等、約88%の生徒は前向きに捉えていた。その一方で、「コミュニケーションをとることが難しいから、こういうかたちの学習は苦手」等の意見もあったので今後改善していく必要がある。

さらに、学びのつながりについてのアンケート調査も行った。検証授業においては、まとめの時間に「今学んでいることが将来・実生活等にどう生きるのか」話し合い、クラス全体で考えた。単元終了後に行った生徒のアンケート結果から、教師のねらいが生徒に伝わっていることが見取れた(図22)。

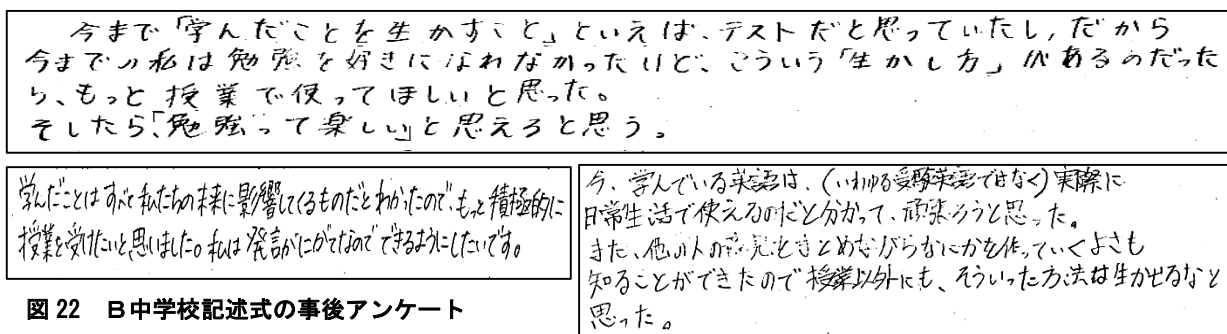


図22 B中学校記述式の事後アンケート

今学校で学んでいることと、自分の将来とのつながり、学ぶ意義等を考え振り返る時間を意図的に設定したことにより、「何のために学ぶのか」を着目生徒CやDを始め、多くの生徒に実感させることができたと考えた。このことから、学びのつながりを意識した授業改善は効果的であったと捉えた。

⑥子どもの実態調査

年度当初と年度末で比較したとき、B中学校で重点を置いた人間関係形成・社会形成能力のアンケート結果は上がった。しかし、その他の諸能力は下がる結果となった(図23)。重点を置いた能力の結果は上がってきたので、学校全体で目指す姿を教師と生徒でしっかり共有する等、改善しつつ今後も取組を続けていくことで、相互に関連・依存しているその他の諸能力の結果も上がってくると考える。

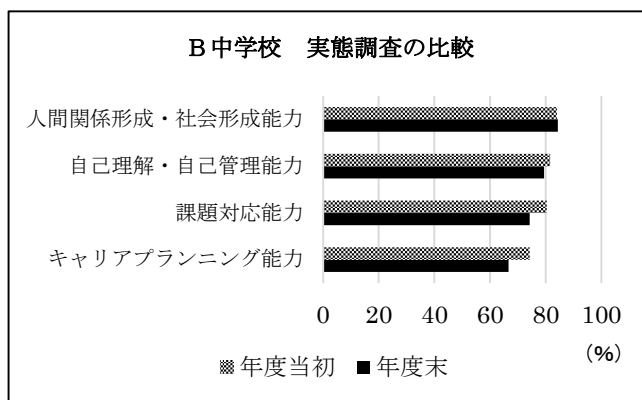


図23 B中学校 実態調査の比較 (年度当初と年度末)

⑦教師の振り返り、改善

一つ目は、小学校からのつながりを意識して単元計画を考えるようになったことである。小学校や中学校の前の学年でどのようなことを学んできているか系統性を踏まえて授業を行うようになった。

二つ目は、教師の声掛けの重要性を再認識した。目指す姿に向けてどう教師が生徒に声掛けをすることが効果的なのか。そのためにどのような授業、活動にするべきなのか、今後も考えていきたい。

三つ目は、目指す姿を生徒も理解できる言葉で設定することである。今回は設定した目指す姿を生徒に分かりやすい言葉に直して生徒に提示した。職員全体、生徒と目指す姿を共有するためには、年度当初から、生徒にも分かりやすく示すことが大切だと分かった。

(3) C小学校5年 体育(保健)

①子どもの実態調査

C小学校の児童の実態を捉えるために、年度当初にアンケート調査を行った。既出2校同様に点数化し、児童の分布をグラフで示した(図24)。

アンケートの分布、教師の見取りを基に着目児童を決めた。各教科等の授業で課題からずれてしまったり、理解が曖昧になってしまったりする傾向があり、自分の言動が周りどのような影響を与えるかを考えることが

苦手な児童Eと、自分のことを家族には相談し表出できるが、学校では教師や友達になかなか自分を出すことができない児童Fに着目した。また、クラス全体の変容を見取った。

②学校教育目標、子どもの実態、教科の特質に応じて育成する基礎的・汎用的能力を重点化

C小学校では、学校教育目標「やさしく、たくましく(・よく考え進んで学ぶ子・素直で思いやりのある子・くじけないでやりぬく子・明るく丈夫な子)」の具現化のため、キャリア在り方生き方教育全体計画、身に付けさせたい力を設定している。C小学校は、平成28・29年度川崎市キャリア在り方生き方教育研究推進校として、校内研究を進めている。今年度は改めて職員全体で児童の実態を話し合い、「素直で明るい子どもが多いが、自信の無さから自分の思いを上手に表現することが苦手である」と再確認した。さらに、年度当初に「お子様にどのように育ってほしいか」保護者アンケートをとった。そこで多く出た保護者の思いをまとめると「自分の意思をもち自主的自発的に行動できる子になってほしい、人に優しく思いやりのある子になってほしい」であった。児童の実態や保護者の願いを受け、「考えや思いをもって自ら行動できる子、他者のよさや考え方を理解共感できる子」というキャリア在り方生き方教育で目指す子ども像を設定した。

体育(保健)を通して、子どもたちがこれからも心身ともに健康で安全な生活を形成していくために、自分自身の現状を把握し、健康上の課題を見付け、解決策を考えて実践することでよりよい自分をつくっていくことはキャリア在り方生き方教育の視点である「自分をつくる」上で大切なことだと考える。本時では、不安や悩みへの対処法について話し合う中で一番自分に合った方法を意思決定する。今回の学習を通して、心の健康について考えるきっかけとし、不安や悩みに対峙したときに主体的に行動できる自己理解・自己管理能力の育成に重点を置いて取り組んでいくこととする。そして、身に付けさせたい基礎的・汎用的能力を明確にするため、指導案の項目1に明記した(図25)。

③身に付けさせたい力の具体的な姿の設定

C小学校の学校教育目標、子どもの実態、教科の特質に応じて重点化した基礎的・汎用的能力から、身に付けさせたい力の具体的な姿を設定した。

高学年としては「課題に向き合い、自分なりの考えをもって取り組むことができる」「思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考えたり、行動したりできる」と設定し、図25のように指導案の項目2に明記した。

児童の実態調査(年度当初)

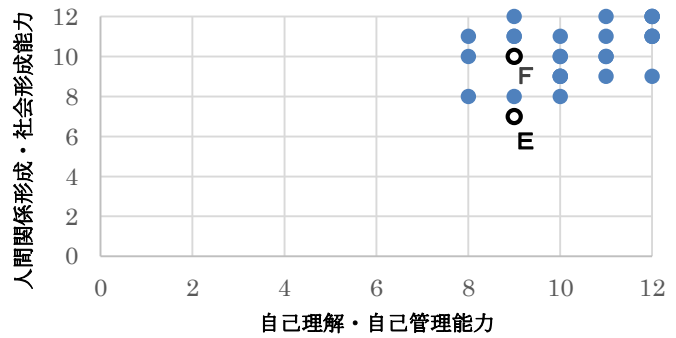


図24 C小学校で年度当初に行った実態調査アンケート分布図

体育科学習指導案

川崎市立C小学校
指導者

1. キャリア在り方生き方教育・身に付けさせたい基礎的・汎用的能力の重点
自己理解・自己管理能力(主体的な行動力)
2. 身に付けさせたい基礎的・汎用的能力の具体的な姿
 - ・課題に向き合い、自分なりの考えをもって取り組むことができる
 - ・思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考えたり、行動したりできる

図25 C小学校検証授業指導案1ページ目

そして、学級目標は、学校教育目標やキャリア在り方生き方教育で目指す子ども像の具体的な姿を意識して決めていった。そのため、行事や学期の振り返りの際に、常にこの具体的な姿に照らし合わせ立ち返り、子どもたちとともに振り返りをすることができた。

④人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善

本単元では、終盤の3時間目に不安や悩みへの対処法を考え、グループや全体で話し合い、自分にあった方法を見つけることをねらい検証授業を行った。

人との関わりについては、本単元の「体育（保健）・心の健康」の学習を効果的に進めるために、保健に関して専門知識をもつ養護教諭と連携して取り組んだ。また、C小学校の重点「自己理解・自己管理能力」の育成を意識し、キャリア在り方生き方教育「自分をつくる」の視点で授業改善をするために、児童のことを一番分かっている保護者と関わることを考えた。学校で保健の学習を実施した日に、考えたことや学んだこと等が書かれているワークシートを子どもたちが自宅に持ち帰り、保護者からその都度コメントを書いてもらうことにした。保健の学習を効果的に進めるために、このような人との関わりを取り入れた単元構想にすることが、学びの定着、つながりも生むのではないかと考えた（図26）。

学びのつながりについては、3年生から始まった保

健の学習が積み重なり、そして今回学習したことがこれからの保健の学習や他教科等の学習、将来・実生活につながっていることを整理した（図27）。

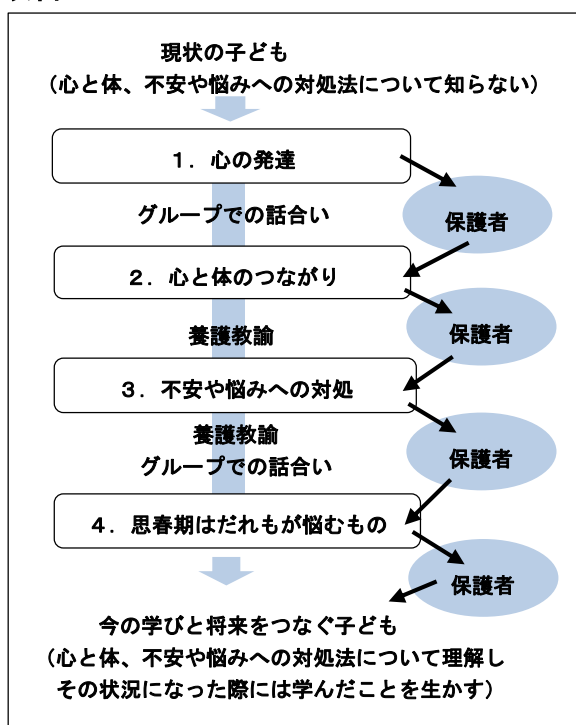


図26 人との関わり、学びのつながりを意識した単元構想

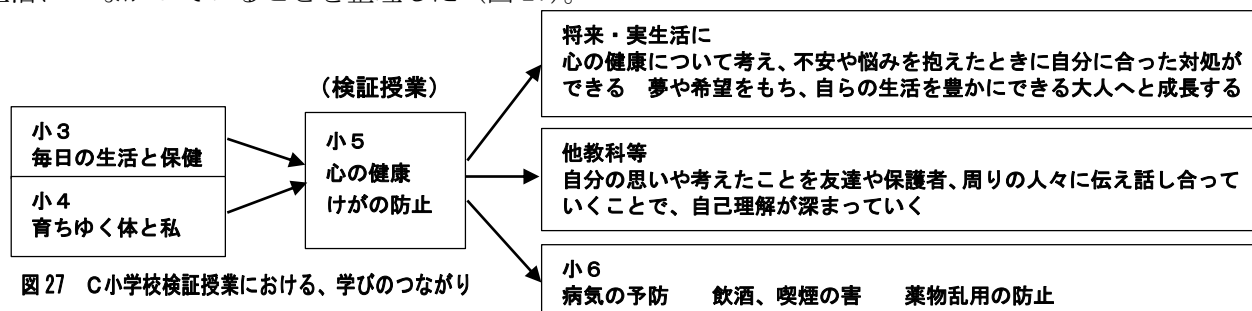


図27 C小学校検証授業における、学びのつながり

特に、不安や悩みを抱えた際にどのように対処すればよいか、子どもたちが自分事として捉え、自分に合った対処法を考え、もしそのような状況になった際には、保護者に相談したり、友達に話したり、今回学習したことを生かすことができるように、学習内容の習得・活用を効果的に行うことを意識した。

⑤授業改善の効果、具体的な姿の表出状況を見取る

検証授業では、体育（保健）の学習で、不安や悩みを抱えたときの対処について自分の考えをもち、グループで話し合った。着目児童Eは話し合いの課題からずれることなく自分の考えを伝えたり、グループの友達の意見を聞いたりしていた。後日とった記述式アンケートからもその様子が見取れた（図28）。

○グループの人と関わりながら「心の健康」について話し合っ
て考えた授業の感想を書いてください。

心の健康の学習としてほかの人の意見を聞いて自分
が思ったこと以外にたくさんの意見があがってその中から自分
にあったことが見つかったのでグループではなしたりするのはい
いと思いました。

図 28 着目児童 E の記述式の事後アンケート

着目児童 F は、授業の導入では不安や悩みを抱えたときの対処について、自分の考えを書くことができなかつた。しかし、グループでの話し合いを行った際には友達の見
意見をよく聞いていた。そして、まとめの際には不安や悩みへの対処法について友達の意見を生かしてしっかり自分の考えを書くことができた。後日とつた記述式アンケートでは、児童 F が授業で学んだことを生活に生かそうとする前向きな様子が見取れた (図 29)。

○保健の授業を通して学んだことや、話し合いで出た意見を、自分の
将来や生活に生かせることはありましたか。

私はなやみや不安なことがあるとき気持ちるくにする方法
がなかったけれど友達と話し合ってくさん見つけることが
できました。これから、自分にあった対処方法を見つけて
生活に生かしていきたいです。

図 29 着目児童 F の記述式の事後アンケート

児童 F は自分一人では不安や悩みへの対処法を考えることができなかつたが、友達との話し合いの中で自分に合う対処法をいくつか見つけることができ、今回の学習を自分事として自分の将来・実生活につなげることができており、児童 F にとって、人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善は効果的であったと捉えた。また、クラス全体の様子については、人との関わりについて、話し合いを行い不安や悩みへの対処法を考えるとともに、養護教諭や保護者との関わりについて効果的であったかどうか見取つた。後日行つた記述式アンケートで、養護教諭や保護者と連携して行つた授業はどうだったか児童に聞いた。「保健の先生に来ていただいて自分達が知らないことや、もっとくわしいことなどを知ることができた」「お母さんから振り返りのコメントをもらって、自分が小さいころから一緒にいるので一番よいアドバイスがもらえたと思う」等の感想が書かれていた。保健に関して専門知識をもっている養護教諭、児童のことを一番知っている保護者と関わることで、児童が自己理解を深めることをねらつたことに効果があつたのではないかと捉えた。

さらに、学びのつながりについてのアンケート調査も行つた。検証授業においては、まとめの時間に「今学んでいることが将来・実生活等にどう生きるか」話し合い、クラス全体で考えた。また、担任の実体験を話した。児童は担任の話を真剣な顔で食い入るように聞いていた。単元終了後に行つた児童のアンケートには、「これから不安や悩みがあつたときに、信頼できる人に相談したり、友達が悩んでいたら相談にのってあげたりしていきたい」「今回の保健の授業を通して、悩みの対処法を知ることができた。将来、健康な体でいられるように悩みができれば相談してすぐに解決しようと思った。心と体のつながりは、自分を成長させるために必要で大切なものなのだと思った」等、多くの児童がこれからの自分に生かすことができると書いていた。児童が今学校で学んでいることと、自分の将来とのつながり、学ぶ意義等を感じることができ、学びのつながりを意識した授業改善は効果的であったと捉えた。

児童 E は同じグループの友達との関わりから、自分では考えられなかつた意見を得て、その意見が自分に合う対処法につながつたと答えており、児童 E にとって、人との関わりを意識した授業改善は効果的であつた。

児童 F は自分一人では不安や悩みへの対処法を考えることができなかつたが、友達との話し合いの中で自分に合う対処法をいくつか見つけることができ、今回の学習を自分事として自分の将来・実生活につなげることができており、児童 F にとって、人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善は効果的であったと捉えた。

⑥子どもの実態調査

年度当初と年度末で比較したとき、C小学校で重点を置いた自己理解・自己管理能力のアンケート結果は上がった。そして、その他の諸能力も上がる結果となった(図30)。つまり、基礎的・汎用的能力は相互に関連・依存した関係にあるので、取組を積み重ねてきたことで、全ての諸能力の結果が上がったと考えられる。

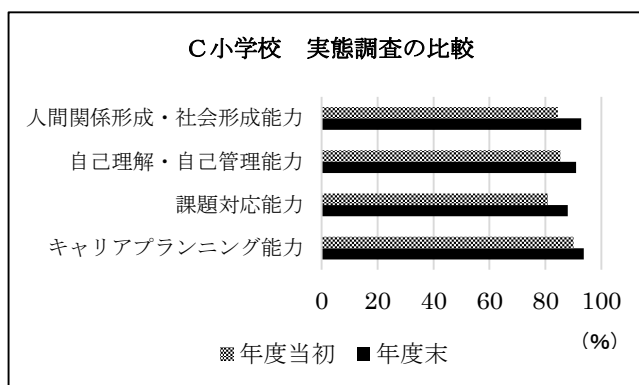


図30 C小学校 実態調査の比較(年度当初と年度末)

⑦教師の振り返り、改善

一つ目は、教科や内容によりどうしたら効果的に指導できるか考えるようになったことである。今回は体育(保健)なので専門知識をもった養護教諭、自己理解を深めるために保護者と関わったことが効果的であった。そして、多くの人との関わりが教科の学習内容の定着に効果的であると分かった。

二つ目は、教科におけるキャリア在り方生き方教育を研究してきて、各教科等のつながりや他クラス、他学年とのつながり等、カリキュラム・マネジメントの重要性を実感した。

三つ目は、子どもたちに基礎的・汎用的能力を身に付けるキャリア在り方生き方教育は、日頃の子どもの見取り、学級経営が大切であり、学校全体で取り組んでいくことで高まりを生むことが分かった。課題は教師間、教科の枠をどのように越えていくかである。

表6 C小学校職員アンケート

C小学校では職員アンケートも行った。表6の記述を見ると、試行錯誤しながらも目指す子どもの姿に向かって、子どもの見取りや指導の工夫を行い、教師自身が変容してきたことが分かる。

- ・授業をする上で、身に付けさせたい力を意識することで、その時間のねらいや視点がさらに定まった感じがする
- ・各教科等の指導で、身に付けた力や知識の往還を考えるようになった
- ・その教科だけの学習にとどまることなく、いろいろな方向から授業を考えたり、子どもを見取ったりするようになった
- ・子どもの学習意欲の向上を感じる。そのため授業の工夫により一層取り組んでいかなければと思う
- ・他の教科等とのつながりを子どもたちと話す機会が増えた 等

(4) 保護者から見たキャリア在り方生き方教育

本研究では、授業改善の効果を子どもの変容、教師の振り返り等からまとめてきた。ここでもう1つの視点から研究をまとめていきたい。それは保護者がキャリア在り方生き方教育をどのように捉えているかということである。新学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」について記されている。そこでC小学校では、年度当初の子どもの実態調査、目指す子どもの具体的な姿の設定から保護者の意見を取り入れた。また、校長が学校だより等で積極的に取組を発信し、どのような力を付けていくか、それがどのような姿なのかを教師、子ども、保護者で共有して1年間取り組んできた。年度末には、学校評価アンケートと併せてC小学校のキャリア在り方生き方教育の取組の評価を行った。保護者アンケートでは、「本校のキャリア在り方生き方教育の今後の推進についてお答えください」と質問したところ、「さらに充実させて」「現状の通り」を合わせ、キャリア在り方生き方教育を推進してほしいという保護者は98%以上でとても前向きな結果となった(図31)。次に、

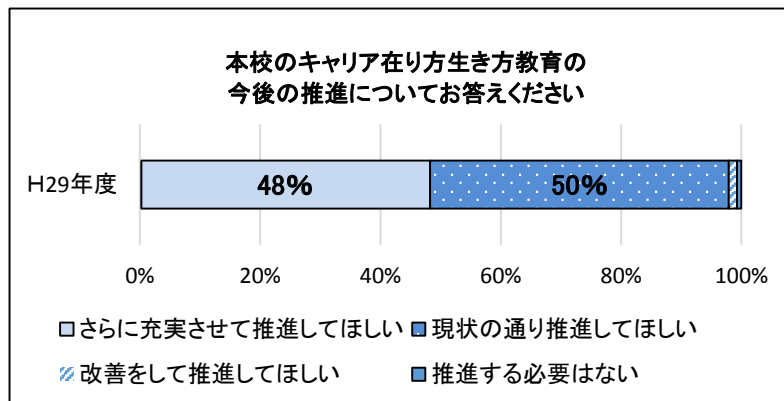


図31 C小学校の保護者アンケート①

「本校のキャリア在り方生き方教育の取組は子どもたちにとって有意義だと思いますか」と質問し、「思う」が73%で「まあまあ思う」と合わせると98%の保護者が有意義だと感じているという結果となった（図 32）。自由記述欄には、「学校ではまず学力をきちんと付けてほしい」「言葉にとげがあり、思いやりのある子の部分を強化

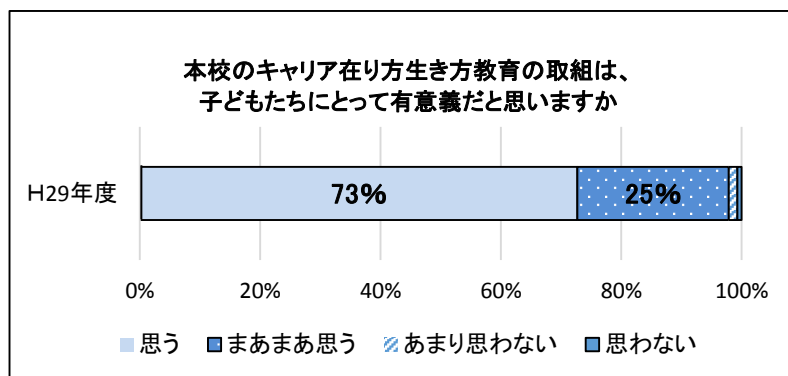


図 32 C小学校の保護者アンケート②

してほしい」等、要望や改善の声があった。その一方で「川崎市や学校でこういった取組をしてもらえると親として本当にありがたい」「学校の中で小さな社会を経験できていてとても素晴らしい」「目指す姿、身に付けさせたい力など目標を明確にして子どもたちが指針をもって様々なことに取り組んでいる生き方教育の推進を応援している」「これからの長い人生を生きていく上で、必要で大切な力だと思う。机の上で得られる学習も身に付けてほしいが、それ以上に身に付けてほしい力だと感じる」等、多くの保護者がキャリア在り方生き方教育の推進に前向きな意見を寄せる結果となった。

キャリア在り方生き方教育を推進していくことは、子ども、教師、保護者の皆にとって有意義であることが改めて分かった。推進することで子どもの変容を見取ることができ、そのために教師自身の変容が必要となる。そして、そのことを保護者も前向きに捉えていることが分かった。新学習指導要領に記載されている「社会に開かれた教育課程」を具現化していくには、川崎市においてはキャリア在り方生き方教育を柱に推進していくことで実現していけると考える。そのためには、C小学校のように校長のリーダーシップのもと学校全体で取り組み、さらに保護者、地域と連携して子どもに身に付けさせたい力の育成を行っていくことが大切であると分かった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

一つ目は、基礎的・汎用的能力の育成は、子どもの実態から重点化すると効果的であることが分かった。本研究では、検証を行ったA中学校、B中学校、C小学校ともに重点化した基礎的・汎用的能力のアンケート結果は上がった。年度当初に、子どもの実態から目指す子どもの姿を設定し、基礎的・汎用的能力の育成を重点的に行う教科・単元等の教育課程を編成することができた。このことで、目の前の子どもに何を育成すればよいのか教師が明確にもつことができた。また、子どもに身に付けさせたい基礎的・汎用的能力、目指す子どもの姿を設定することは、キャリア在り方生き方教育のスタートであり、柱であることが分かってきた。なぜならば、常に授業を見直す視点として、「子どもに身に付けさせたい力は何か」「具体的にどのような姿なのか」と立ち戻ることができるからである。

二つ目は、教師が「人との関わり、学びのつながりを意識した授業改善」を行うことで、子どもにとっては教科の内容だけにとどまらず、社会を生きていく力の育成や、他教科等や将来・実生活につながるが見えてきた。子どもは多様な人との関わりの中で成長し、基礎的・汎用的能力を身に付けていく。本研究では、人との関わりを意識した単元構想をしたことで、学びの定着に効果があることと、子どもたちが今の学びと他教科等や将来・実生活とのつながりを自覚している姿を見取ることができた。

2 今後の課題

キャリア在り方生き方教育の意義や授業のイメージを職員全体で共通認識をもって取り組むことである。本研究では、各学校の子どもの姿、感想等から変容や成長が見られており、アンケート結果が全てではないが、重点化した基礎的・汎用的能力以外の諸能力が、アンケート結果では必ずしも上がらなかった学校があった。前述の通り、基礎的・汎用的能力は包括的な能力概念であり、相互に関連・依存した関係にあるため、各学校の子どもの実態に応じて育成する能力を重点化しても、その他の諸能力のアンケート結果も上がると考えていた。C小学校はキャリア在り方生き方教育の研究推進校として、校内研究を通じて職員全体で取り組んできたため、全ての基礎的・汎用的能力においてアンケート結果が上がったと考えられる。A中学校、B中学校も取組を継続し、人との関わりについては、教師、保護者、地域等、多様な人との関わりから学ぶ学習計画や、学びのつながりについては、「何のために学ぶのか」という学ぶ意義や今の学びが他教科等や将来・実生活にどうつながっているのかを効果的に考えさせられる教科・単元を再編成したりする等が大切になってくる。また、各学校に応じた取組を職員全体で積み重ねていくことで、重点化した基礎的・汎用的能力だけでなく、その他の諸能力のアンケート結果も上がってくるのではないかと考える。そして、さらなる子どもの変容や成長が見られると考える。

小学校は学級担任制、中学校は教科担任制とそれぞれに特性がある。職員全体で共通認識をもつために小中学校で共通して大切なことは、年度当初に子どもの実態から身に付けさせたい力を重点化し、具体的な姿を設定することである。そして、基礎的・汎用的能力の育成に向けて、職員全体で教科等横断的な授業のイメージを共有し、子ども自身、保護者、地域と目指す子どもの姿や教育活動における取組を共有することで、より充実したキャリア在り方生き方教育を行うことができると考える。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言くださいました講師の先生、また校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【主な参考文献】

- 藤田晃之 著 『キャリア教育基礎論 ― 正しい理解と実践のために ― 』実業之日本社 2014年
小林宏己 著 『授業研究 27 の原理・原則 ― 授業力向上のための実践的思考』学事出版 2015年
仙台市立寺岡小学校 著 藤田晃之 監修『キャリア教育の底力』光文書院 2015年
西川純 著 『アクティブ・ラーニングによるキャリア教育入門』東洋館出版社 2016年
長田徹・清川卓二・翁長有希 著『新時代のキャリア教育』東京書籍 2017年

【指導助言者】

- | | |
|-----------------------------------|-------|
| 早稲田大学教育・総合科学学術院教授（川崎市総合教育センター専門員） | 小林 宏己 |
| 川崎市教育委員会事務局総務部教育改革推進担当部長 | 橋谷 由紀 |
| 川崎市教育委員会事務局総務部教育改革推進担当課長 | 添野 雅美 |
| 川崎市教育委員会事務局総務部教育改革推進担当指導主事 | 安斎 陽子 |
| 川崎市教育委員会事務局総務部教育改革推進担当指導主事 | 安田 洋 |
| 川崎市総合教育センターカリキュラムセンター指導主事 | 高橋 徹 |
| 川崎市総合教育センターカリキュラムセンター指導主事 | 望月 隆 |